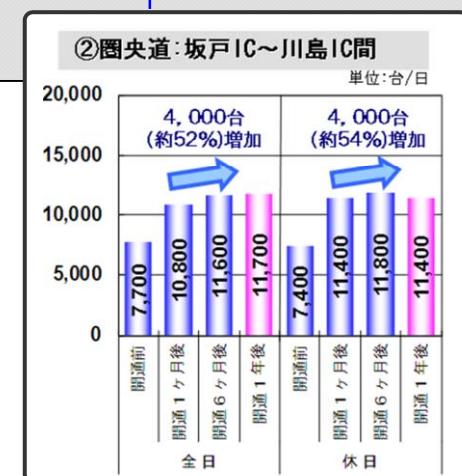
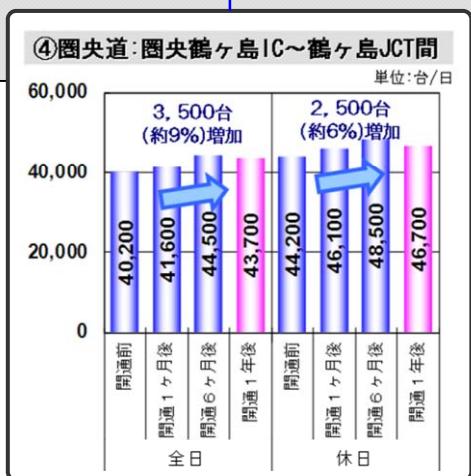
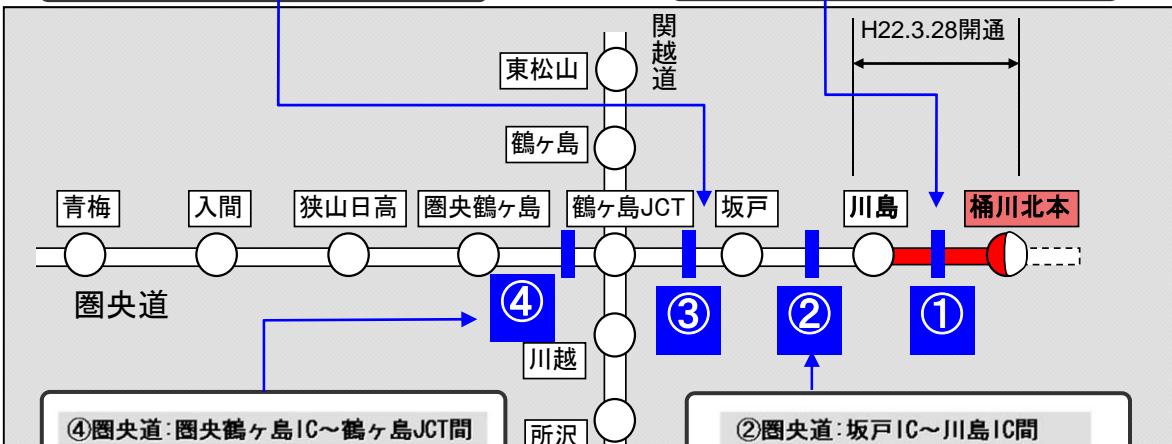
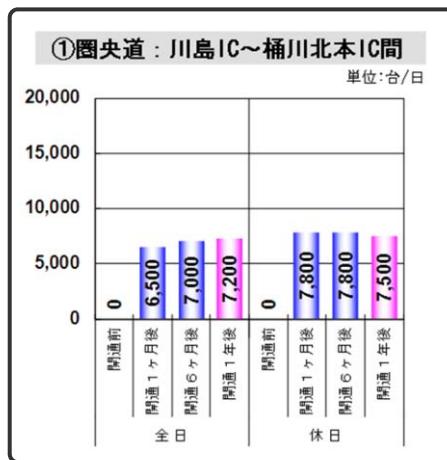
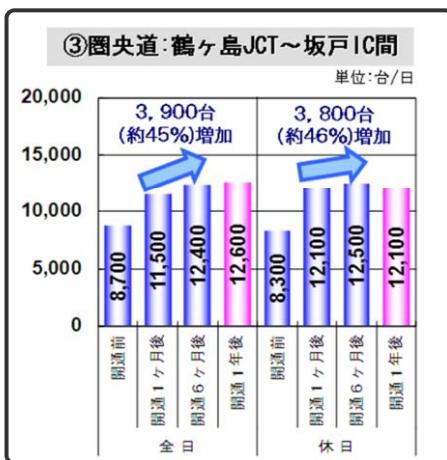


## 圏央道の交通量の変化

■平成22年3月28日に開通した圏央道 川島IC～桶川北本IC間の交通量は、開通1ヵ月後(4月)は6,500台／日、開通後1年間の平均は7,200台／日と順調に増加しています。

■圏央道の利用交通量が開通前(H22.2.1～H22.3.27の開通直前の2ヶ月間の平均交通量)と比べ、開通後1年間の平均は鶴ヶ島JCT～坂戸IC間で約45%増加、圏央鶴ヶ島IC～鶴ヶ島JCT間で約9%増加しています。



開通前の交通量 : H22. 2. 1～H22. 3. 27

開通1ヶ月後の交通量：H22.4.1～4.30 開通6ヶ月後の交通量：H22.4.1～9.30

開通1ヶ月後の交通量：H22.4.1～4.30 開通8ヶ月後の交通量：H22.4.1～12.31  
開通1年後の交通量：H22.4.1～H23.3.10 ※いずれも日交通量の平均値

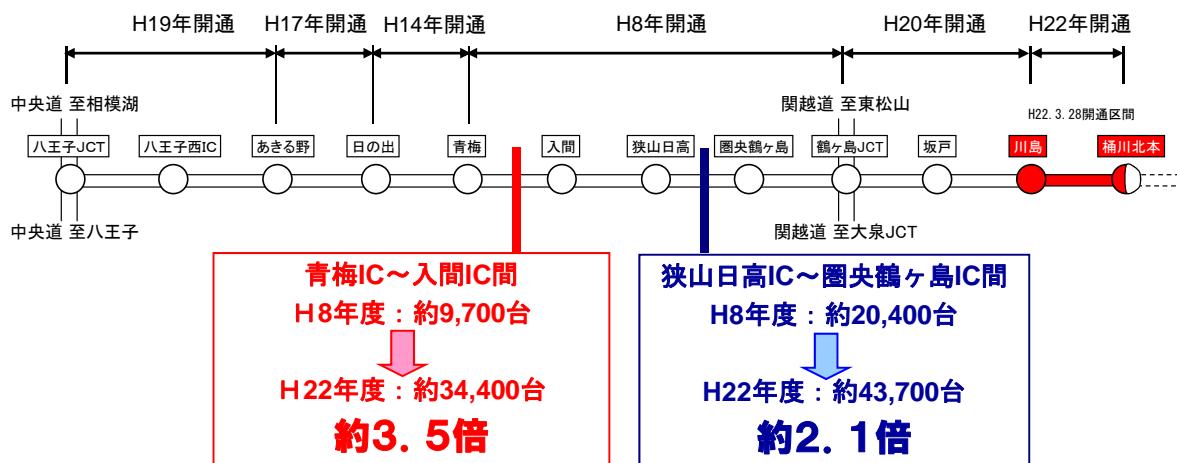
開通 1 年後の交通量 : 1122. 4. 1 ~ 1123. 3. 10 ないし  
図中增加交通量 = 開通 1 年後交通量 - 開通前交通量

※交通量はETC車以外も含む全車種合計の断面交通量（トラフィックカウンター〔道路に備えつけられている交通量（概数）の自動計測装置〕）による速報値。

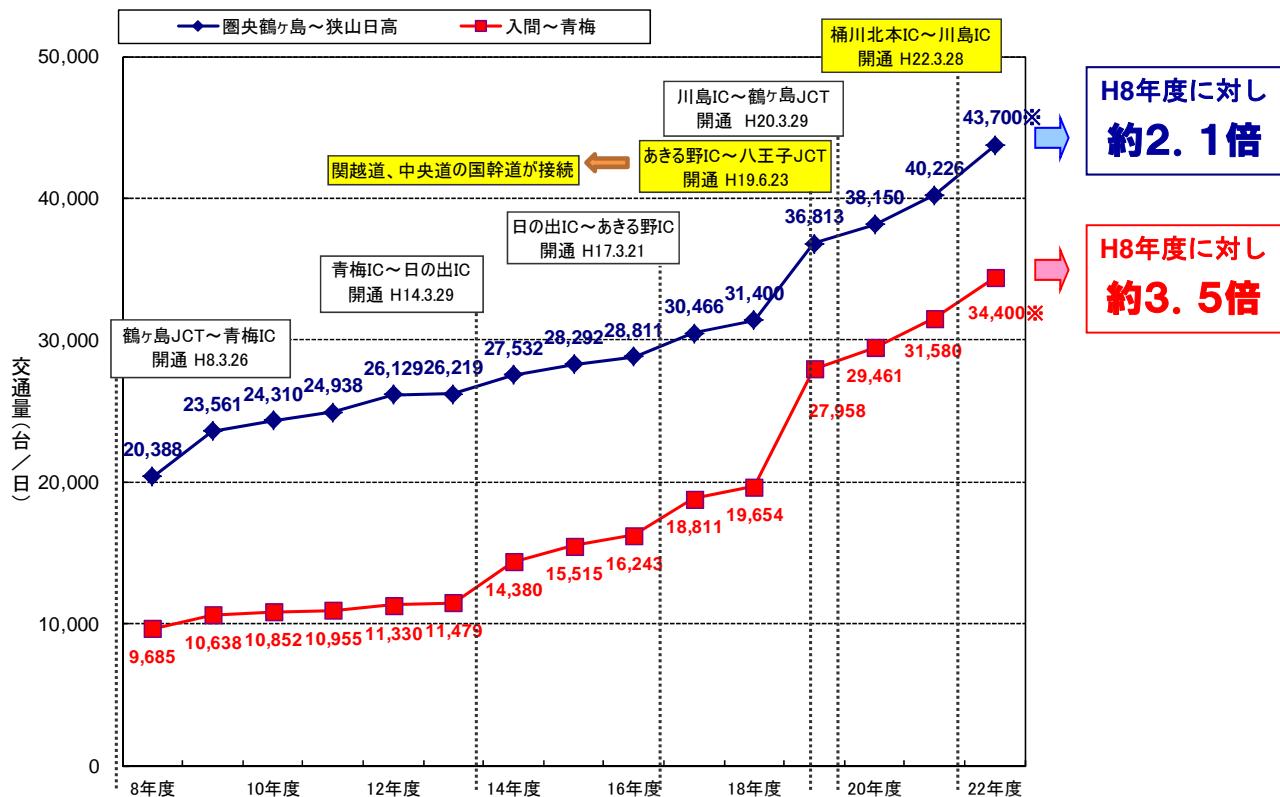
# 圏央道の年度別・IC区間別交通量

■平成8年3月の圏央道の初めての開通(鶴ヶ島JCT～青梅IC)以降、圏央道の順次整備により、交通量が年々増加しており、平成8年度と比べ平成22年度の交通量は、青梅IC～入間IC間で約3.5倍、狭山日高IC～圏央鶴ヶ島IC間で約2.1倍と大きく増加しています。

## 圏央道路線図



## 圏央道の年度別IC区間交通量



注: 交通量はNEXCO東日本資料。

\*H22年度の交通量は東日本大震災の影響を除く平成22年4月～平成23年2月の平均値としている。

## 企業立地の活発化

■埼玉県では、平成18年度から圏央道インターチェンジ周辺の産業集積を図るため「田園都市産業ゾーン基本方針」を作成し、9地区の先導モデル地区が選定され、産業基盤づくり、企業立地を推進しています。

- ・川島インター産業団地では全区画47haに18社の企業進出が決定し、6社が操業中
  - ・菖蒲南部産業団地では全区画19haにおいても、全5区画中、4区画4社の企業進出が決定し工事中

■圏央道の埼玉県区间沿線地域への新規工場立地が着実に進んでいます。

【「田園都市産業ゾーン基本方針」（埼玉県）に基づく先導モデル地区】

田園都市産業ゾーン

関東道周辺地域(インターチェンジ・ジャンクションから概ね5kmの範囲の地域)において、工場や流通加工施設などを集積させるゾーン。



### )) 進出企業の期待の声

川島インター産業団地

A社：圏央道と東北道・常磐道が接続することで輸送の効率化とともに需要増加に期待しています。

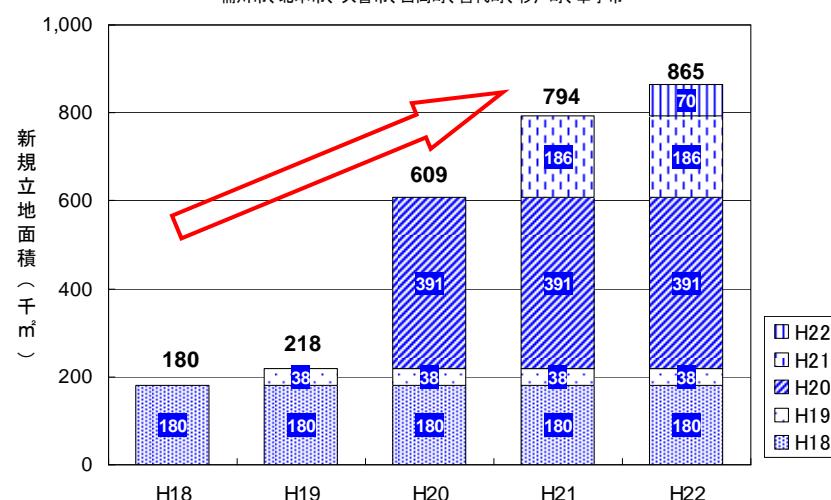
B社:川島工場に3つの工場を統合したこと、生産コストが削減された効果は大きい。今後、圏央道を利用した広域的な速達性の向上に期待している。

■埼玉県内の圏央道沿線地域における新規工場立地面積(累積)の推移※1

#### ※1 「玉提立地動向調査」(経済産業省)上川作成

「工場立地動向調査」(経済産業省)より作成  
■由道沿線町村における新規工場立地面積(累計)の推移

## 圏央道沿線市町村における新規工場立地面積(累計)の推移 対象とした沿線市町・飯能市、入間市、日高市、狭山市、鶴ヶ島市、川越市、坂戸市、川島町



# 輸血用血液製剤の緊急輸送に圏央道が活躍

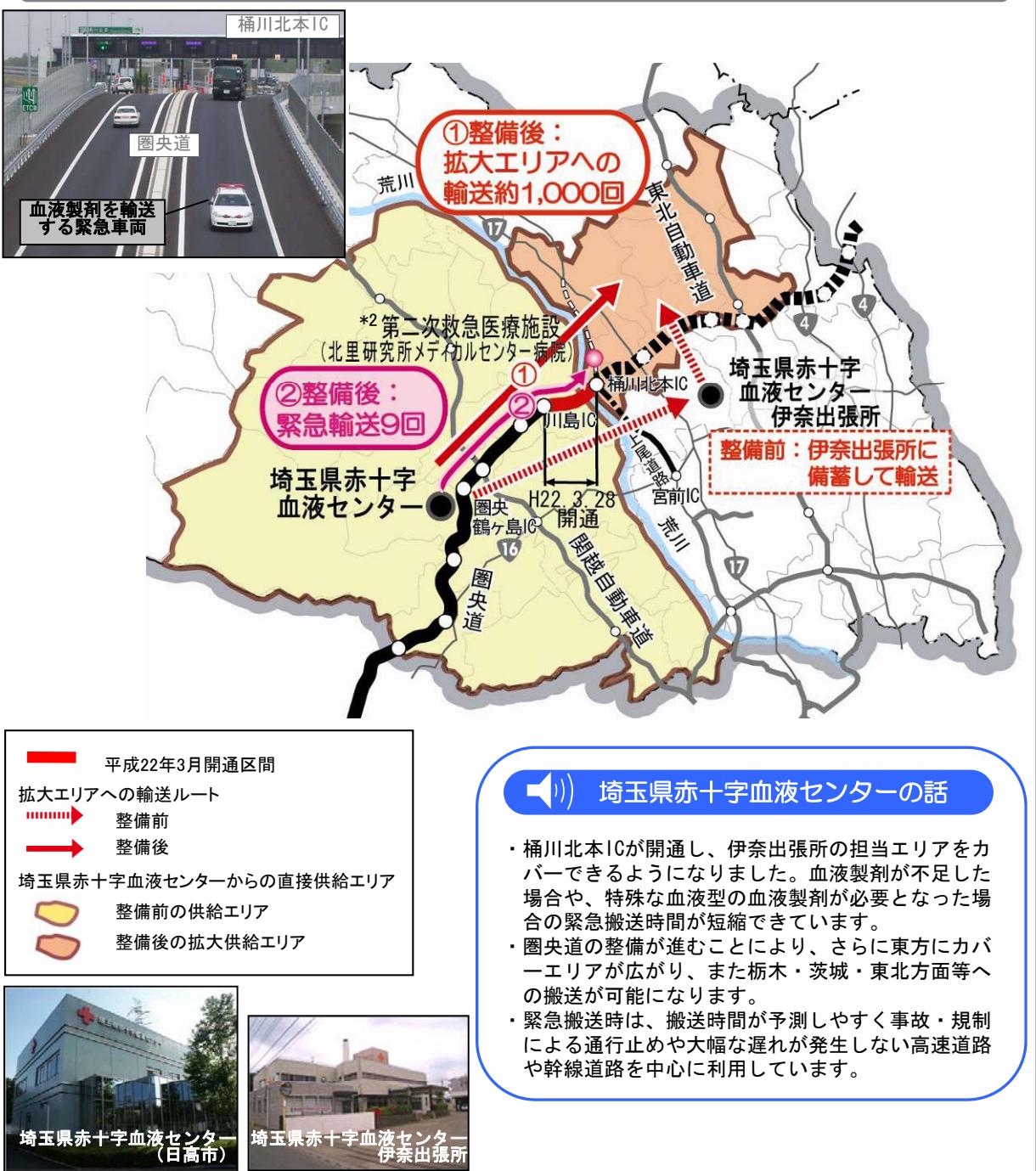
- 圏央道に隣接する埼玉県赤十字血液センター（日高市）にて輸血のための血液製剤<sup>\*1</sup>を製造し、県内の病院へ供給しています。
- 桶川北本ICを利用した輸血用血液製剤の輸送は、開通後1年間で約1,000回、うち緊急輸送も9回発生しており、安全で定時性の高い圏央道が人命救助に役立っています。

\*1「血液製剤」：献血された血液をもとに輸血に使用するために製造したもの。

輸血用血液製剤のうち「血小板」の使用期限は採血後4日間であるため、迅速な輸送が必要。

\*2「第二次救急医療施設」：入院や手術を必要とする重症救急患者に対応する病院。

## 【埼玉県内の血液製剤輸送の変化】



注) 拡大エリアへの輸送回数、緊急輸送回数：平成22年4月～平成23年3月の実績値

## 被災地への輸血用血液製剤の輸送に高速道路が貢献

### ■埼玉県赤十字血液センターからの声 (\*1)

- 東北地方に甚大な被害をもたらした東日本大震災では、定時性に優れ、安全で安心な高速道路による輸血用<sup>\*2</sup>血液製剤の輸送を行いました。
- 具体的には、圏央道に隣接する埼玉県赤十字血液センターから製造した血液製剤を東北自動車道の岩槻ICまで輸送し、そこで全国から羽田空港へ空輸で集められた血液製剤とともに東京の輸送班が東北6県へ中継して輸送を行いました。



- 圏央道が延伸されれば有事における首都圏や東北地方への血液製剤の輸送に大きく寄与するので、期待しています。

埼玉県赤十字血液センター

\*1 平成23年4月12日(火)の埼玉県赤十字血液センターからの聞き取り調査結果

\*2 「血液製剤」：献血された血液をもとに輸血に使用するために製造したもの。輸血用血液製剤のうち「血小板」の使用期限は採血後4日間であるため、迅速な輸送が必要。

### 【被災地への輸血用血液製剤の輸送状況】

#### 埼玉県赤十字血液センターから東北6県へ輸送された血液製剤

血小板約2,100人分



赤血球約1,240人分



※震災後4月5日まで 埼玉県赤十字血液センター資料

